

佐賀・中原遺跡

なかばる

- 1 所在地 佐賀県唐津市原字西丸田
- 2 調査期間 二〇〇〇年(平12) 四月～二〇〇一年三月
- 3 調査機関 佐賀県教育委員会・唐津市教育委員会
- 4 調査担当者 立石泰久・美浦雄二・太田正和
- 5 遺跡の種類 集落跡・自然流路跡
- 6 遺跡の年代 六世紀後半～九世紀前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

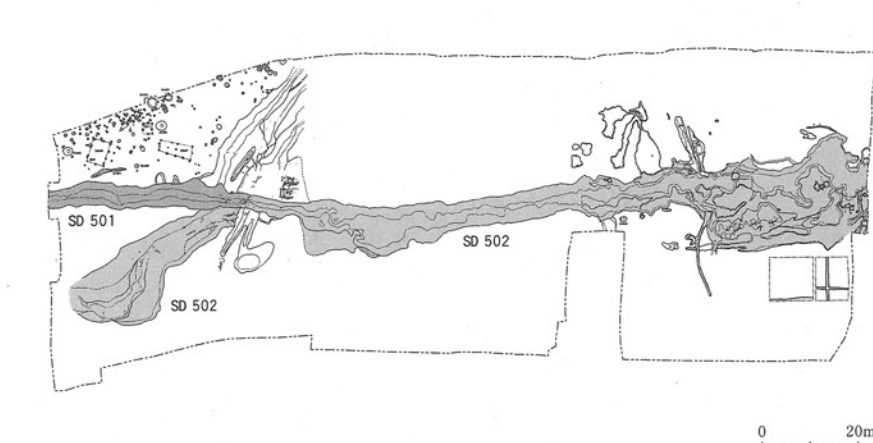
遺跡は鏡山の南西部五・五kmの水田地帯にあたり、唐津湾および松浦川によって形成された古砂丘列上に立地する。これまで一九六



(唐津・浜崎)

五年の日仏合同調査や一九八六年の唐津市教育委員会の調査があり、鉄戈、鉄矛を副葬した弥生時代中期の甕棺墓や古墳時代中期の周溝墓などが確認されている。本遺跡周辺では奈良、平安時代の遺構は未確認である。本調査は西九州自動車道

建設に伴うものであり、弥生・古墳時代の墳墓を確認した地点から東方約二〇〇mに位置する。これまで一区から七区の調査を実施し奈良時代の集落跡と水田跡を検出した。二区の集落と水田の間を流れる旧河道から木簡二点、墨書土器や中空円面硯、転用硯、木製品などが出土した(本誌第二号)。



5区 奈良・平安時代遺構配置図

このうち一棟には片側に廂がつく。

溝SD五〇二は、調査区中央を東西方向にはしり、調査区西側でやや南方に屈曲する。この屈曲地点から直線的な溝であるSD五〇一が西方向に掘削される。SD五〇二は二区の旧河道とつながるものと思われ、規模は幅約8m深さ約1mの自然流路である。埋土中から多量の土師器、須恵器や灯明皿と思われる土師器杯などともに九点の木簡が出土した。出土遺物の時期は六世紀後半から九世紀前半である。特筆される遺物として緑釉陶器の皿・碗一や奈良三彩の小壺蓋一がある。また五区からは約七〇点の墨書土器が出土し、「林少領」「林」「館院」などがあり注目される。

8 木簡の釈文・内容

- (1) $\begin{array}{c} \bullet \\ \text{「呼二辺玉女別百俵} \\ \text{老見地日後見} \end{array}$ $\begin{array}{c} \text{凡死人家} \\ \text{念聖玉女二} \end{array}$ $\begin{array}{c} \text{〔野力〕} \\ \text{〔二力〕} \\ \text{〔賢力〕} \end{array}$ $\begin{array}{c} \text{「} \\ \text{小反十} \end{array}$ $\begin{array}{c} \text{「} \\ \text{女} \end{array}$ $\begin{array}{c} 180 \times (49) \times 4 \quad 061 \end{array}$
- (2) $\begin{array}{c} \text{「大村戸主五戸秦部宮} \\ (157) \times 24 \times 8 \quad 019 \end{array}$
- (3) $\begin{array}{c} \text{「廿三日} \\ \text{員} \end{array}$ $\begin{array}{c} \text{〔料以力〕} \\ \text{員} \end{array}$ $\begin{array}{c} (125) \times 36 \times 8 \quad 019 \end{array}$
- (4) $\begin{array}{c} \text{「向} \\ \text{寺} \end{array}$ $\begin{array}{c} \text{街力} \end{array}$ $\begin{array}{c} (59) \times (24) \times 2 \quad 081 \end{array}$

- [illegible]

(1)は上下・左削り。右割れ。曲物底板の断片。左端中央に側板との結合のための樫皮を通した孔が残る。二行目下部には墨痕が残らないが文章の構成からあと二文字あった可能性が高い。(2)は上・左削り。下折れ。「宮」は名の一部で、この下にも文字が続く可能性が高い。一九九九年度調査出土木簡でも「大村戸主」の文字がみ

られ、松浦郡に大村郷、駅があったことを示唆する。(3)は二片接続。上・左右削り、下折れ。(4)は上下折れ、左削り、右割れ。(5)は二片接続。上下折れ、左右削り。但し左辺のうち下半は割れ。

(6)は現在一〇断片に分かれる。上端は山形に削り出す。左右両辺も削りの原形を保つ。下端は切断。廃棄の際の切断であろう。大型の文書木簡の断片か。表面中央に比較的大振りな文字を一行に記し、その脇の行に日付を書く。日付の下は空白を置いて墨痕が続く。裏面は右上端部に四〜五文字程度の墨痕が残る。日付以下三カ所の墨痕は人名か。形態的には北九州市長野角屋敷遺跡(旧上長野A遺跡。本誌第二〇号)出土木簡に類似するが書式は異なる。

(7)は二度の使用痕跡を残す。上端は二次利用後さらに削って整形。左右両辺も二次利用後の削りの可能性がある。下端のみ一次利用時の削りの原形を保つか。一次利用は文書木簡であろう。文字の大半が削られ、内容は不明。書き出し(現裏面下端)の文字割付から、かなり大型の木簡だったとみられる。割り削って細くし、下端を切断して短くして材を整えた上で文字を削り、二次的に利用する。

二次利用は帳簿状の木簡。一次利用時とは天地逆・表裏共逆。表面には四人の人名を記し、いずれにも合点を付す。合点の形状は同一ではなく、照合の都度数回にわたり付されたか。右上部の墨痕がこれらの人々の性格を示すと考えられるが判読できない。裏面には「首小黒」という人名と稲の数量が記される。稲の数量記載がある

点が表示面と異なり、表面の人名と同時に記されたかどうかは不詳。(8)は若干間を置いて続くと考えられる二断片からなる。上の断片は上下折れ、左右削り。下の断片は上折れ、下・左削り、右割れ。紙などの単位の「帳」があり、その上は数字と考えられる。残画から「二」「二」「五」のいずれかであろう。(9)は上・左右は原形。下端は二次的に整形か。荷札木簡の断片と考えられ、表裏とも墨痕が残るが判読できない。

なお、木簡の釈文・内容については奈良文化財研究所渡辺晃・馬場基氏のご教示を得た。

(小松 譲)



(1) (赤外線デジタル写真)

(2)